



地域と連携した防災減災活動の推進 ～「標津町オリジナルHUG」作成と 「地域循環型防災教育」の構築～



北海道標津高等学校
校長 森田 泰史

1 はじめに

本校は、知床半島の付け根に位置する自然豊かな標津町にある生徒数100名の普通科高校です。防災減災活動の始まりは、平成29年に生徒会交流で実施したDoHUG（北海道版HUG）でした。生徒会の活性化として生徒が中心となる「高校生防災リーダー」の育成を目指す活動として始まり、被災地へのボランティア活動、町民やPTAとのHUG、標津町とともに取り組む「標津町オリジナルHUG」の作成と実施、「地域循環型防災教育」の構築へ発展してきました。

2 防災減災活動の目標

標津町は、自然災害も多い地域であり災害に対するレジリエントな力を育むことが求められています。本校の体育館は、非常用電源を備えた町指定避難所であることから、高校生が主体的に避難所を運営できる体制を整えることと、役場と協力して防災教育に取り組む関係を構築し、町とともに防災教育を推進していくことを目標としました。

3 「標津町オリジナルHUG」 作成に向けて

DoHUGを使用した防災減災活動を続けていましたが、2019～2020年度防災教育チャレンジプランに採択されたことをきっかけに防災減災活動を見直しました。そこで、役場危機管理室と協働で、町で起こりうる災害を想定した「標津町オリジナル

HUG」の開発に着手しました。危機管理室長と生徒が災害に関する学習を重ね、町の災害として喫緊の課題であるアイスジャムによる融雪洪水を想定したHUGを作成することになりました。

まず、生徒はDoHUGと静岡県HUGを参考にカードの開発に取りかかりました。HUGを構成するカードは3種類あります。「住民カード」は、町の住民構成を考え、大家族や技能実習生を加え、さらにゲームを進めるときに親近感が湧くように住民の名前を町にゆかりの生き物としました。「情報提供カード」では、3月の気温に合わせた場面設定としました。「イベントカード」は、町内で起こると予想されるイベントを盛り込みました。部活動の生徒が活動していることを想定し、高校生の役割を考えるカードを加え、さらに春季ということでヒグマの出現など標津町らしさも加えました。また、コロナ禍でもあるため感染症に関するカードを追加しました。校内図は透明なビニールシートを上から被せ、ボードマーカーで情報を自由に書き込めるように工夫しています。また、破れにくい紙を使用することで繰り返し使用できるようにしました。通常のHUGは、2～3時間かかるのに対し、「標津町オリジナルHUG」は説明を加えても1.5時間程度で終了できるように配慮しました。コロナ禍ではありましたが完成した「標津町オリジナルHUG」を地域住民とPTA、中学生と取り組みました。制作に携わった生徒は、自分の役割を考え、災害に対応できる実践力を養うことができ、防災リーダーと



書き込みできる HUG



完成した標津町オリジナル HUG



夢団との HUG



オリジナル HUG 完成

しての意識をさらに高めることができました。

4 「地域循環型防災教育」の構築

町では、地域の園小中学校に向けた防災教育を危機管理室が担当していました。高校生は、防災減災活動を町に還元したいという思いから、園小中学校で防災出前授業を企画・実施していました。これらをきっかけに地域の防災教育を高校生が担い、防災教育を受けた子供たちが次世代に防災教育を伝えるという循環作りに着手しました。これが「地域循環型防災教育」となり、町の防災教育の柱になりました。さらに、町は、「地域循環型防災教育」を推進するため、長期休業時の防災研修を支援しています。今年、3月と8月に釜石市へ、そして東北沿岸の津波、原発、水害被災地で研修を重ねました。特に、釜石市では、三陸ひとつなぎ自然学校と釜石高校生が設立した夢団～未来へつなぐ ONE TEAM～との交流を深め、8月に「標津町オリジナル HUG」を使っ

た研修を行いました。生徒たちは、互いに良い刺激となり、防災減災活動に向けた新たな決意を胸に刻みました。



こども園での出前授業

5 おわりに

町との協働関係を構築することで、高校の防災減災活動が町の防災教育へと発展しました。しかし、レジリエントな力を育む防災教育は継続することが大切です。町と取り組む「地域循環型防災教育」の輪がより強くなるよう今後も町と協力した防災教育に取り組みます。

“静岡県「避難所 HUG」使用許諾番号 215 号”